

# 上野の杜の 波瀾 万丈

第十三回

## 日本美術の保護 後篇

吉田千鶴子

本学の歴史と浅からぬ縁がある世界文化遺産「中尊寺金色堂」。  
東京美術学校による金色堂修理は国宝修理の先駆けとなった。

### 中尊寺金色堂の修理

昨年六月、小笠原諸島が世界自然遺産に、中尊寺・毛越寺とその周辺が世界文化遺産に登録されたことは、東日本震災後の暗雲を少し吹き払ってくれたかのような朗報であった。特に中尊寺は、本学の歴史と浅からぬ縁があるのでなおさらだ。

一八九六(明治二十九年)年の古社寺保存会の設置と翌一八九七(明治三十一年)年の古社寺保存法の公布により、わが国の文化財保護の基本ができたことは周知のことだが、このとき二万円余りの国庫補助を受けて最初の修理がおこなわれたのが中尊寺金色堂内および宝室類であり、修理を担当したのが岡倉天心率いる東京美術学校(以下、「美校」という)だった。もちろん、それを決定したのは古社寺保存会だったにせよ、いち早く美校が担当することにし、異論を封じるかのごとく古社寺保存法公布の四カ月も前に工事に着手することができたのは、同会委員にし

て美校校長兼帝国博物館美術部長であった天心の実力と持ち前の機略の結果にはかならない。

修理担当を命ぜられたのは美校助教の六角紫水と大村西崖(ともに美校一期生)、雇の新納忠之介(同二期生)と亀田徳太郎(同)および研究科生の木村武山・高橋島谷・菅原大三郎・武谷富造・石河寿衛彦・本島袈裟彦・松田為賀・氏家静修、四年生の児島明、三年生の澤木彦門・三村耕三、卒業生の秋月復郎・佐藤栄三郎と囑託教師の伊東忠太で、みな一応の知識や技術を身につけていたとはいえ、修理の経験などない青年たちであり、しかも一同当惑するほど金色堂は破損していたが、彼らは当時としては最大限の学術的見地に立って、真摯な研究的姿勢で修理に臨んだ。地元の新聞などもそれを好意的に報じている。

天心や今泉雄作は、明治維新直後からの町田久成ら先覚の実績を土台に、十数年にわたって日本美術保護制度樹立の準備を推し進めたのであるが、その一環として実施した全国的古美術調査の折にしばしば無謀な修理の例を目にし、一刻も早く学術的見地に立った新しい修理法、

つまり、現今の古美術修理の原則である「現状維持修理」を普及させる必要があると考え、実施し始めていた。金色堂修理もその方針をとったことは、紫水の「現在あるものを今後減らさぬ様にする。修繕は復元するのが目的であるが、つけ足しはしないと云う建前で始めた。」(中尊寺修理について)「六角紫水の古社寺調査日記所収」という言葉からも窺い知れる。

### 修理落成式

金色堂その他の修理が完了した一八九八(明治三十一年)年五月二十九日、それを記念して法要・完成式典・宝物展観・能狂言などが華やかに挙行された。平泉駅は入出を予測して前日に開設されたばかり。この小さな駅に当日は七千人を超える乗降客があったと地元紙が伝えている。これより参拝客が一段と増えたらしい。

ただし、この盛大な催しも、事情を知るものにとっては一抹の寂しさがあった。式典に列席すべき天心ないし紫水、新納らは二カ月前の美

校騒動で辞職してしまい、代わりに美校代表として式典に派遣されたのは、漆工家の辻村松華だったのである。中尊寺には修理の経過を把握できる記録文書綴が保存されているが、その末尾のあたりに綴じ込まれている修繕事務所の中尊寺側一同の天心宛書簡控え(明治三十一年四月八日付)には天心の配慮のお蔭で修理が落成に近づいたことへの感謝の辞とともに、辞職に対する落胆の情が生々しく表明されていて印象的だ。

### 修理の成果について

金色堂は一八九二(昭和三十七)年から七年をかけて解体大修理がおこなわれ、木造鞘堂の代わりにコンクリートの覆堂が設けられるなど、保護環境が整えられて現在の姿となった。そのため、明治期の美校による修理は影が薄くなってしまうが、ある意味でそれは昭和の大修理に勝るとも劣らない歴史的意義があるといえる。なぜなら、「現状維持修理」による国宝修理

のモデルケースになっただけでなく、人材育成にも大きく貢献したからである。たとえば、修理担当者の中かの六角紫水がのちに漆芸制作・研究において、大村西崖が東洋美術史学において、新納忠之介が国宝修理において、伊東忠太が日本建築史学・建築設計において輝かしい業績をあげたことなどはその顕著な事例である。

天心は美学・美術史の学識を有し、また、国策としての日本美術保護・奨励論にもよく通じていたが、一八八四(明治十七)年の法隆寺夢殿救世観音との対面を「一生の最快事なり」と生徒に語ったように、理窟ではなく自分の目で古美術を見て強い感動と喜びを覚えたことから日本美術のために身を挺することになった。感動こそ美術にたずさわる者の最大のエネルギー源であることを体得していたため、後進にも見学・修理・模写模刻などを通して直に古美術に接する機会を与えようと努めた。金色堂修理の場合も、修理自体を完璧に遂行するだけでなく、前途ある青年たちがまず美に感動し、研究心を起こし、それぞれが美術の分野で成長していく土台を作るよう期待したのである。

(よしだ・ちづこ)／美術学部教育資料編纂室講師

次号予告

「東京音楽学校と邦楽科問題」

橋本久美子

東京音楽学校において、邦楽教育は初期よりおこなわれていたが、一九三六(昭和十一)年に初めて「科」として設置された。同校における邦楽をとりあげる。



中尊寺金色堂内(中尊寺所蔵写真)



新納忠之介



大村西崖



六角紫水